

1. コラム「論点提起」：過去・現在・未来をつなぐ責任や如何

最近、明治神宮外苑の再開発事業が都市計画決定の告示(2022年3月10日)以降も、外苑内の樹木の伐採・移植で揺れている。「伐採対象となっている樹木の中には、創建時に全国から献木・献金されて、労働奉仕により植えられた樹齢100年を超えるものが多数含まれる」とのこと。

なぜ、過半の樹木を伐採しなくてはならないのか。それは、再開発事業中もスポーツ施設の利用を継続させるために、場所を変えながら解体と建設を行う段階建て替え方式と、芝生広場への新たな施設の建設を行う時間と空間の最大有効活用にある。確かに、通常の民間施設空間であれば、合理的な方法かも知れないが、神宮外苑という公共的施設空間でなおかつ歴史文化性を有する樹木群を事業主体の経済合理性だけで判断して良いのだろうか。過去百年の歴史性、そしてその間に培われた文化性の元での現在そして将来への配慮が欠けているのではなかろうか。

日本イコモス国内委員会が東京都に提出した「樹木伐採を回避し『近代日本の名作・神宮外苑』を再生する提案」は、第三者の専門家としての知の声であり、参考になる提案となっている。

参考：神宮外苑地区におけるまちづくりについて 2022年5月19日 三井不動産㈱ (宗)明治神宮 (独法)日本スポーツ振興センター 伊藤忠㈱ <https://tinyurl.com/yyuw72ou>

参考：明治神宮外苑の再開発事業、国立競技場の二の舞い防ぐために一旦立ち止まりを 日経クロステック/日経アーキテクチュア 2022.05.13 <https://tinyurl.com/y26a86p5>

昨今、生活空間に根ざしたこうした歴史文化的施設空間への配慮に欠けていると思われる事例が頻発している。物語のある樹木(群)の放置/伐採、芸術家の残したアトリエ施設空間への無関心、利用可能な空き家/古民家あるいは由緒ある屋敷等の廃屋化・更地細分化、生産緑地廃止に伴う雑木林の皆伐、等々。当該施設空間の持つ価値に対する想像力をもう少し働かせて欲しい。

別の分野においては、「10兆円大学ファンド」に象徴される「国際卓越研究大学法」が成立(2022年5月18日)した。これは「選択と集中」によるイノベーションを期待することを念頭に置いた大学運営支援であるが、現在を生きる特定の人による選択と集中で果たして未来のイノベーションを期待できるのか。イノベーションの多くは「予定調和」的には期待できないのでは。

大学という空間は知における過去・現在・未来をつなぐ場であり、「選択と集中」ではなく、未来における多様な知の可能性を育むべく「バラマキ」でいいのではなかろうか。民間企業支援の「バラマキ」よりも、大学へのバラマキの方が未来への効果が期待できるのではなかろうか。

「選択と集中」はビジネス社会での基準であり、大学(教育、研究)における価値基準ではない。

参考：“10兆円”大学ファンドは日本の「大学変革」につながるか？ 困難さも伴う、その行く末、2022.05.19 現ビジネス <https://gendai.ismedia.jp/articles/-/95360>

いずれにおいても、後世に影響する判断は、過去・現在・未来をつなぐことの責任を自覚して行われているかが問われる。単なる手続き論で済む話ではない。一時あるいは一部の経済的合理性基準でもってのみ判断するべきでないことはこれまでの事実が証明している。多様な価値観を有する「市民の集合知」と「専門家の専門知」との統合が問われているが可能性や如何……。